

コミュニケーション言語能力論における 語用論的能力と社会言語学的能力

坂本 勝信, 谷 誠司

Pragmatic Competence and Sociolinguistic Competence in
Models of Communicative Language Competence

Masanobu SAKAMOTO, Seiji TANI

2017年9月8日受理

抄 録

本稿ではコミュニケーション言語能力論における語用論的能力と社会言語学的能力等の扱われ方を概観した。その結果、体系的な内部構造の違いによって、1) 言語機能を明確に扱わないグループ、2) 語用論的能力を言語機能の能力と社会言語学的能力から構成されると考えるグループ、3) 語用論的能力と社会言語学的能力を同列に扱うグループに分類できることが分かった。また、本研究の対象である、コミュニケーション言語能力論における語用論的能力では「間接発話行為」「含意の解釈」といった語用論の特徴が考慮されていないこと、そして、社会言語学的能力では対象とする言語使用の適切性が受け身的かつ、学習者のレベルによる可変性を考慮しない可能性があることを考察した。

キーワード：コミュニケーション言語能力論，語用論的能力，社会言語学的能力

1. はじめに

第二言語教育においてコミュニケーション言語能力¹養成は、重要な目的の一つであるが、コミュニケーション言語能力の意味するところを明確に説明することは容易ではないだろう。1970年代よりその定義づけが試みられているが、主な構成要素として挙げられることが多いのが語用論的能力と社会言語学的能力である。しかしながら、先行研究間においては、二つの能力の定義と相互の関係性に揺れがあるように思われる。両能力の定義や相互の関係性を明らかにすることは、当該能力の効果的な養成や適正な評価をするにあたって重要な意味があると言えよう。

¹ 本稿では communicative competence と communicative language competence はどちらも「コミュニケーション言語能力」とする。

本研究の目的は、コミュニケーション言語能力論における語用論的能力と社会言語学的能力に関する議論を概観し、整理することである。具体的には、以下の二点について、順に述べる。

(1)語用論的能力と社会言語学的能力はどのように扱われてきたか。

(2)語用論的能力と社会言語学的能力に関する共通点及び、相違点は何か。

2. コミュニケーション言語能力論における語用論的能力と社会言語学的能力の扱われ方

2.1. Hymes (1972)

コミュニケーション言語能力 (communicative competence) は、Chomsky (1965) の言語能力 (linguistic competence) に対する批判から Hymes (1972) によって、提唱されたものである。その批判は、Chomsky の言語能力の概念は、実際に発話が起こる文脈で発話の適切さを決定する社会文化的要素を考慮に入れていないため、言語使用に必要とされる部分的な説明をしているにすぎず、言語能力 (理想的な母語話者が内在化している言語システム) 対言語運用 (具体的な場面における現実の言語使用) という構図はおかしいというものである。清水 (2009: 4) は、「Hymes は、知識だけでなく、運用も含んだものとして、また文法的な正しさだけでなく、発話の容認性や適切さなどの社会文化的要素も含んだものとして、言語能力を再定義したわけである」としている。また、義永 (大平) (2005: 56) は、「(前略) 言語形式を適切に使用する能力を社会言語能力と呼び、言語能力だけでなく、社会言語能力をも含めたより広い概念として伝達能力 (=筆者注: コミュニケーション言語能力) を位置づけています」としている。

2.2. Canale & Swain (1980)

コミュニケーション言語能力を 1) 文法的能力 (grammatical competence), 2) 社会言語学的能力 (sociolinguistic competence)², 3) 方略的能力 (strategic competence) から構成されるとした。

社会言語学的能力は、「使用の社会文化的規則 (sociocultural rules of use)」と「ディスコースの規則 (rules of discourse)」から成り立っている。「使用の社会文化的規則」は、発話がどのように適切にされたり理解されたりするかを規定し、主に2つの点に焦点を当てている。1つ目はコンテキストの要因 (話題, 参加者の役割, 場面, 相互作用の規範など) に依存する社会文化的コンテキストの中でコミュニケーション上の言語使用がどの程度適切であるか, 2つ目は社会文化的コンテキストの中で使用した文法的形式が態度, レジスター, スタイルの点でどの程度適切であるかである。「ディスコースの規則」は結束性と一貫性である。

² sociolinguistic competence の日本語訳には「社会言語学的能力」と「社会言語能力」の2つがあるが、本稿では日本言語テスト学会の言語テスト用語集に従い、「社会言語学的能力」とする。

Canale & Swain(1980) の社会言語学的能力の説明に対して、柳瀬(2006:74) は社会文化的規則は適切性にかかわるものであり、会話の含意 (conversational implicature) のような発話行為的な語用論的側面は扱っておらず、文法的能力でも扱っていないこと、またディスコースについても文法的能力と社会言語学的能力のどちらに属するとも明確でないことを指摘している。

2.3. Canale (1983)

Canale (1983) のモデルは Canale & Swain (1980) の拡張モデルとも言えるが、コミュニケーション言語能力に技能 (skill) というハイムズのいう「使用する力 (ability for use)」が含まれる点、ディスコース能力 (discourse competence) が社会言語学的能力から独立した点、また、社会言語学的能力が社会文化的規則のみを含むようになった点が異なる。

2.4. Bachman (1990)

Bachman (1990) はテストングの観点からコミュニケーション言語能力のモデルを考案した (図 1)。このモデルではコミュニケーション言語能力を 1) 言語能力 (language competence), 2) 方略的能力 (strategic competence), 3) 心理・生理的機能 (psychophysiological mechanisms)³, 4) 知識構造: 人間社会に関する知識 (knowledge structure: knowledge of the world) から構成されるとした。

1) 言語能力は組織的能力 (organizational competence) と語用論的能力 (pragmatic competence) に分けられた。組織的能力は文法的能力 (grammatical competence) 及び、テキスト的能力 (textual competence)⁴ から成り立つとした。また、語用論的能力は発話内能力 (illocutionary competence) と社会言語学的能力 (sociolinguistic competences) からなるとした。

2) 方略的能力は Canale & Swain (1980) などでは補償的な役割しかなかったが、Bachman (1990) では中核的な役割を果たし、「技巧的で円滑なコミュニケーションを伝える能力として、もっと広域に捉えられて」おり (近藤ブラウン, 2012:32), 言語能力や知識構造 (人間社会に関する知識), 心理・生理学的機能, さらに、コンテキストの特徴を統合・調整する役割を担っている。

3) 心理・生理的機能について、
柳瀬 (2007:129) は

いくら言語能力や世界知識を内在していても、それらと外的世界を媒介するメカニズムが存在しなければ、それらは活かされない。こういった内的世界と外的世

³ psychophysiological mechanisms の日本語訳は「心的メカニズム」(近藤ブラウン, 2012:32) や「身身協調メカニズム」(柳瀬, 2007:127) などあるが、本稿では Bachman (1990, 97) に従い、「心理・生理的機能」とした。

⁴ 内容的には「ディスコース能力 (discourse competence)」であり、田中 (2015:99) では「テキスト/談話 (textual/discourse) 能力」と紹介している。

界をつなぐ経路としては聴覚と視覚があるし、様態としては受容（外的世界から内的世界へ）と産出（内的世界から外的世界へ）がある。いずれにせよ、こういったメカニズムを通じて内的世界という心と、外的世界との直接の接点である身体は結びつく。

と説明している。

4) 知識構造：人間社会に関する知識（knowledge structure : knowledge of the world）は「関連づけるための社会文化的知識，および『実社会の』知識」である。（Bachman, 1990 : 98）



図 1: Bachman (1990) のコミュニケーション言語能力のモデル

(Bachman, 1990:97・99 と清水, 2009 : 9 を参照にして作図)

語用論的能力にある発話内能力と社会言語学的能力について更に説明をする。Bachman (1990:103) は「ここで提示される語用論的能力の概念には、発話内能力つまり容認できる言語機能を遂行するための語用論的規約に関する知識と社会言語学的能力つまり特定の文脈において言語機能を適切に遂行するための社会言語学的規約に関する知識が含まれる」と説明している。

発話内能力は、さらに、いくつかの下位機能から構成されている。Bachman (1990:103-18) や Bachman & Palmer (1996:80-81) を参照しまとめると、以下のようになる⁵。

- ①観念的機能：自分の意図する意味を表現する。観念的機能には命題を表現したり、また知識や感情についての情報を交換したりするために言語を使用することが含まれる。(記述, 分類, 説明など)
- ②操作的機能：自分の回りの世界に何らかの影響を与える。
 道具的機能 (あることを行うため) (例: 要求, 提案, 命令)
 制御的機能 (他人の行動を統制するため) (例: 規則, 規制)
 相互作用的機能 (対人関係を形成・維持・管理するため) (例: 挨拶, いとまごい)
- ③学習的機能：自分の回りの世界に関する知識を広める。(例: 指導, 学習)
- ④想像的機能：ユーモアや美的目的のために言語を使ったり解釈したりする。
 (例: 映画を見る, 詩を作る, 冗談を言う)

社会言語学的能力について、Bachman (1990:109) では「社会言語学的能力は言語使用場面の特徴によって決定される言語使用の規約を統制、またはそういった規約に対する感受性もしくはそれを統制する能力である。(中略) この社会言語学的能力によって私たちはその状況に適切な方法で言語の諸機能を遂行することができる」と説明し、社会言語学的能力は次の能力から構成されているとしている。

- ①方言や変種の違いに対する感受性
- ②言語使用域の相違に対する感受性
- ③自然さに対する感受性
- ④文化的指示とスピーチの形体を解釈する能力

Bachman (1990) のモデルにおいて、注目すべき点は語用論的能力である。柳瀬 (2006:120) は「従来のコミュニケーション能力論では一括して社会言語学的能力として扱われてきた、言語機能の成立に関する知識と、その適切な使用に関する知識、という2つの側面がそれぞれ、語用論的能力、社会言語学的能力として独立して記述されたことに気をつけておきたい」と指摘している。また、清水 (2009:10) も社会言語学的能力を語用論的能力の下位構成要素としている Bachman のモデルは、「『発話とそれによって遂行される行為との関係』と『適切な言語使用を促進する文脈の特

⁵ 柳瀬 (2006:122) は「バックマンの『発話内能力』という用語も、まさにこういったオースティン以来の語用論に基づいている。だが、ハリデーの理論はこういった標準的な語用論の枠組みから外れている。(中略) ハリデーのいう『機能』では唯一、操作的機能が標準的な意味での『機能』であるに過ぎない。」と指摘している。

徴』を取り扱うとする」の語用論の定義 (vanDijk, 1997) に一致し 語用論の分類 (語用言語学と社会語用論) にも対応する」として評価している。

2.5. Bachman & Palmer (1996)

Bachman (1990) から大きな変更はない。ただし、能力 (competence) とあったものが、知識 (knowledge) になっている。例えば、Bachman (1990) では言語能力 (language competence), 組織的能力 (organizational competence), 語用論的能力 (pragmatic competence) とあったものは、Bachman & Palmer (1996) では言語知識 (language knowledge), 組織的知識 (organizational knowledge), 語用論的知識 (pragmatic knowledge)⁶ になった。また、Bachman (1990) にはあった心理・生理学的機能 (psychophysiological mechanisms) が、Bachman & Palmer (1996) ではなくなっている。

2.6. Celce-Murcia, Dornyei & Thurresl (1995)

Bachman (1990) や Bachman & Palmer (1996) のモデルは言語テストに関するもので、言語指導の目的に関するものではないという立場から、Celce-Murcia, Dornyei & Thurresl (1995) は Canale & Swain (1980) と Canale (1983) の後継モデルとして、教育また、評価に関係したコミュニケーション能力モデルを提案した。

Celce-Murcia et al. (1995) のモデルは、図2のような構成をしている。

図2に沿って、各構成要素について説明をする。

このモデルはディスコース能力 (discourse competence) が中心的な能力になっている。ディスコース能力は1つのまとまった口頭あるいは、書記のテキストを成立させるために語や句、文、発話の選定や配列に関わる。下位項目としては、結束性、直示性、一貫性、ジャンル・総称的構造、会話構造があり、矢印は様々な能力が常時相互に関係し合っていることを示す。

次に三角形にある構成要素を見ていく。左下にある言語的能力 (linguistic competence) は、語彙や文法的な知識である。下位項目としては、統語論、形態論、(受容&



図2: Celce-Murcia, Dornyei, & Thurresl (1995) のコミュニケーション能力モデル

⁶ 清水 (2009: 12) は Bachman & Palmer (1996) の語用論的能力の特徴として「語用論的能力は知識から構成されており、現実にその知識を使う能力ではない。」と指摘している。

産出の) 語彙, (発音のための) 音韻論, (スペリングのための) 正字法である。

右下の行為的能力 (actional competence) は, すべての重要な言語行為や言語行為セットを理解したり作り出したりする能力である。中間言語語用論 (interlanguage pragmatics) に非常に近い。Bachman (1990) や Bachman & Palmer (1996) と同じように, 社会文化的要因に関連する要素と実際の意図に関連する要素を分けている。下位項目としては, 言語機能の知識 (対人的やり取り, 意見, 感情, 説得, 問題, 未来に関するシナリオ⁷) と言語行為セット (言語行為別の定型化されたやり取りの知識) が含まれている。

上にある社会文化的能力 (sociocultural competence) は, 効果的に言葉を理解したり使用したりするために必要な文化的背景知識である。社会文化に関連する要因は, 4つのカテゴリー: ①社会的文脈上の要因 (参加者の変数 [年齢や性別など] と状況の変数 [時や場所など]), ②スタイル上の適切性に関する要因 (ポライトネスストラテジーやスタイル上のバリエーション [フォーマリティやレジスター]), ③文化的要因 (目標言語コミュニティに関する社会文化的背景知識, 主要な方言や地域差に関する認知度, 異文化への認知度), ④非言語コミュニケーションの要因 (動作学的要因, 対人空間的要因, 接触学的要因, パラ言語的要因, 沈黙) に分けられる。

最後に最も外側に位置する方略的能力 (strategic competence) は Canale & Swain (1980) と同じで, コミュニケーション上問題が生じたときの補償的役割を果たしている。

Celce-Murcia et al. (1995) のモデルにおける語用論的能力と社会言語学的能力との扱いは, Bachman (1990) のモデルと同じで, 言語機能 (「行為的能力」) と言語使用の適切性 (「社会文化的能力」) に分かれている。ただし, 「社会文化的能力」の③文化的要因にある「目標言語コミュニティに関する社会文化的背景知識」は, Bachman (1990) のモデルの「社会言語能力」より文化的要素が強いと考えられる。また, 「社会文化的能力」の④非言語コミュニケーションの要因も Bachman (1990) のモデルの「社会言語能力」には含まれていない。

2.7. Celce-Murcia (2007)

Celce-Murcia, et al. (1995) のモデルとほぼ同じであるが, 1995年のモデルで行為的能力 (actional competence) の中であつた言語行為セット (knowledge of speech act sets) が, 定型表現能力 (formulaic competence: 固定表現やコロケーション, イデオムを扱う) として独立した。また, 1995年のモデルで独立した構成要素であつた行為的能力は相互作用能力 (interactional competence)⁸の下位項目になり, 相互作用能力は行為的能力だけでなく, 会話能力 (conversational competence) や非言語 / パラ言語学的能力 (non-verbal/paralinguistic competence) も含むように

⁷ 望みや希望を表明したり見つけ出したりすること。約束することなど。

⁸ 2.8. では interactional competence が「相互行為能力」と訳されているので, それと区別するために「相互作用能力」と訳す。

なった(図3参照)。非言語/パラ言語学的能力は1995年のモデルでは社会文化能力の下位項目に入っていたが、2007年のモデルでは相互作用能力の下位項目になっている。

以下では語用論的能力と社会言語学的能力に関係すると思われる、社会文化的能力(sociocultural competence)と相互作用能力(interactional competence)について説明をする。

Celce-Murcia (2007) のモデルでは社会文化的能力(sociocultural competence)は1995年のモデルと同じようにトップダウンの役割を維持している。社会文化的能力とは、コミュニケーションの全体的な社会的および、文化的文脈の中で適切にメッセージを表現する方法を指し⁹、目標言語の社会文化的規範を参照した言語のバリエーションに関する知識も含まれる。1995年のモデルでもいくつかの社会文化的変数を記述しているが、そのうちの以下の3つは2007年のモデルでも重要とされている。

- ①社会的文脈要因：参加者の年齢、性別、地位、社会的距離、関係、力と影響
- ②スタイルの適切性：ポライトネスストラテジー、ジャンルやレジスターの感覚
- ③文化的要因：目標言語グループの背景知識、主要な方言/地域の違い、異文化認識

トップダウンの役割を果たす社会文化的能力に対して、相互作用能力(interactional competence)はボトムアップの役割を果たす。相互作用能力は言語によって重要な点で異なるので、大変大切であるとされている。相互作用能力には、2007年のモデルでは少なくとも次の3つのサブコンポーネントがあるとされる。

- ①行為的能力：共通の言語行為と言語行為セットを目標言語でどのように実行するかに関する知識
- ②会話能力：会話におけるターン・テイクング・システムに固有のものや他の対話のジャンル(会話を開始したり終了したりする方法、話題を作ったり、変えたりする方法など)
- ③非言語/パラ言語学的能力：キネティックス(身体言語)、非言語的なターンシグナル、バックチャンネル行動、ジェスチャーなど

Celce-Murcia (2007) のモデルにおける語用論的能力と社会言語学的能力との扱いはCelce-Murcia, et al. (1995) のモデルとほぼ同じであるが、1995年と2007年

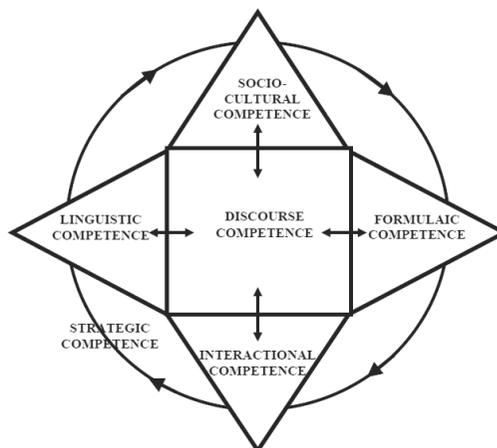


図3：Celce-Murcia (2007) コミュニケーション能力モデル

⁹ Celce-Murcia (2007:46) では「社会文化的能力とは話し手の語用論的能力を指す」とあるが、その後の文章からは内容的には言語使用の適切性を指していると思われる。

のモデルにある社会文化的能力の中の「文化的要因」の記述において、2007年のモデルでは1995年のモデルにあった「目標言語コミュニティに関する社会文化的背景知識」という文言が落ちて、「目標言語グループの背景知識」となっており、2007年モデルでは文化的要素が薄まっているとも考えられる。

2.8. ネウストプニー (1995)

ネウストプニー (1995: 46-47) は、コミュニケーションはコミュニケーションをするためにするのではなく、社会文化的目標のため、実質行動(社会文化行動)をするために、「すべてのコミュニケーション行動が、実質的な行動を基盤に持っている」としている。

そして、ネウストプニー (1982: 53, 1995: 42・45-49・68-69, 1999: 5-6) ではコミュニケーション行動は「言語(文法)能力」(=統語論, 形態論, 語彙/意味論, 音韻論, 表記論など)と「社会言語能力」(=言語(文法)能力以外の, 言葉を場面に応じて適切に使用できる能力)から達成され、「言語(文法)能力」と「社会言語能力」が合わさった能力を「コミュニケーション能力」とした。さらに、実質行動(社会文化行動, インターアクション)を成立させるためには「コミュニケーション能力」とその言語を使う成員に共通の行動習慣や価値観など(文化コード)である「社会文化能力」が必要であるとした。つまり、インターアクション(実質行動, 社会文化行動)を成立させる「インターアクション能力」は、「コミュニケーション能力」と「社会文化能力」から構成されている¹⁰(図4参照)。

社会言語能力については「顔の表情や姿勢, 会話やあいさつのルーティン(決まり文句), 話題の選択, 相手の分類, 日本語あるいは他のことばのいろいろの変種(バラエティー)を使う能力やその変種の評価などに関する能力」(ネウストプニー, 1995: 59)と説明し, 具体的には Hymes(1962)のモデルを修正して, 次の9項目を含んでいるとした(ネウストプニー, 1995: 42-43)。

- ① 点火ルール (どのような場合にコミュニケーションを始めるのか)
- ② セッティングルール (いつ, どこでコミュニケーションするか)

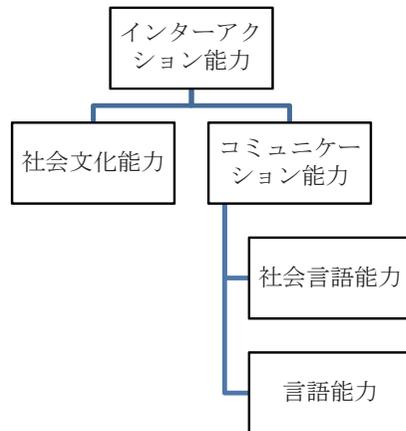


図4:ネウストプニー (1995:103) のインターアクション能力モデル

¹⁰ 中井 (2010:9-10,63-66) では「社会文化能力」=「インターアクション能力」とし, さらに「社会文化能力」は「社会言語能力(コミュニケーション能力)」と「言語能力」が含まれているとしている。

- ③参加者ルール（誰とコミュニケーションするか）
- ④バラエティールール（どの言語，方言，スタイルなどを使うか）
- ⑤内容のルール（何を伝えるか）
- ⑥形のルール（メッセージをどう形づけるか）
- ⑦媒体のルール（メッセージを送るとき，どのようなチャンネルを使うか）
- ⑧操作のルール（コミュニケーションに対してどのような行動をとるか）
- ⑨運用のルール（メッセージをどのように具体化するか）

また，社会文化能力については

ネウストプニー（1995：109-110）は，

人類学者および社会学者は，これまでのところ「文化と社会についての明示的な文法」というべきものを作り出せないでいる。先へ進むのに最も適切な方法は，フィッシュマン（1972）によって提唱されたインターアクション領域という概念を使用することであろう。領域とは，共通の特徴をもった場面から構成される。この概念は理論的な厳密さに欠けるが，実際問題としては有用である。主要な領域は以下の通りである

としている。

そして，次の8つの領域（①日常生活領域・②家庭領域・③交友領域・④教育領域・⑤職業領域・⑥公的生活領域・⑦サービス領域・⑧娯楽および文化領域）を提示した。

ネウストプニー（1995）のモデルにおける語用論的能力と社会言語学的能力との扱いをBachman（1990）のモデルとの比較から考えると，言語機能に関する語用論的能力については扱われておらず，言語使用の適切性については「社会言語能力」で扱われていると思われる。また，Bachman（1990）の「知識構造：人間社会に関する知識（knowledge structure：knowledge of the world）」がネウストプニー（1995）の「社会文化能力」に相当すると考えられる。

2.9. 相互行為能力（interactional competence）

Canale & Swain（1980）からBachman & Palmer（1996）までのモデルに共通する考えは，①「ある状況で獲得した能力は他の状況にも適用可能で，能力の発達はすなわち対応可能な状況の広がりであると捉え」，②「能力を個人に属するものとみなし」，③「言語習得を本質的に言語規則や語彙の学習であるとみなし，（中略）コンピュータの情報処理モデルと共通の前提を有し，個人の頭の中に言語知識が蓄積されている過程が習得であるとする考え方」である（義永〔大平〕，2005：65-67）。

これに対して，①「能力はあくまでも具体的・個別的・状況依存的なものであり」，②「能力を特定の個人に属する抽象的な概念として捉えるのではなく，具体的な状況において，対話者相互の協働を通じて達成される過程と」みなし，③「言語習得をある共同体の成員になる過程とみなし，知識やスキルは，ある共同体の実践に，より経

験豊かな他者とともに参加することによって習得される」(義永 [大平], 2005: 65-67) という考え方に基づく「相互行為能力 (interactional competence)」が社会文化的観点から提唱されている。

相互行為能力の課題については、近藤ブラウン (2012:36) が次の二つの問題点を指摘している。一点目は、妥当性や信頼性を考慮しながら、個人に属さない特性としての相互行為能力を、教室でどう評価し、解釈すべきなのかという点である。二点目は、「相互行為能力」の構成要素は何であり、それが従来個人に属する能力とされてきた社会言語学的能力、語用論的能力、方略的能力などの構造との違いをどう明確に説明するのかとの点である。

3. 考察

第2章ではコミュニケーション言語能力論における語用論的能力と社会言語学的能力等の扱われ方を概観したが、その主な内容を表1にまとめた。なお、相互行為能力についてはその構成要素が明らかになっていないことから考察の対象にしない。

第3章では前章までの内容から見えてくる語用論的能力(語用論的能力に相当する能力)(以下「語用論的能力」に統一)と社会言語学的能力(社会言語学的能力に関わる能力)(以下「社会言語学的能力」に統一)に関する共通点及び、相違点を、「大きい議論」と「小さい議論」に分けて述べたい。なお、本考察においては、「機能的な能力」を語用論的能力、「言語使用の適切性に関わる能力」を社会言語学的能力であると考える。

大きい議論というのは、大局的な見地から3つに分かれる。第一に、体系的な内部構造の違いに関するものである。具体的には、(1)言語機能を扱っているか、(2)(3)語用論的能力と社会言語学的能力の関係性に関わるもの、つまり、包摂するかされるか、同列に扱うかといったことである。第二に、「語用論」の扱いに関するものである。第三に、「社会言語学的能力の適切さ」の扱いに関するものである。

一方、小さい議論というのは、先行研究において、(4)コミュニケーション言語能力の構成要素として重要な能力の1つと見られるディスコース能力の扱いはどうなっているか、(5)非言語/パラ言語学的能力の扱いはどうなっているか、(6)社会言語学的能力に「文化」の要素があるかどうか、ということである。

まず、大きい議論について述べる。

第一の体系的な内部構造の違いについては、以下の(1)(2)(3)のグループに分類される。

(1)言語機能を明確に扱わないグループ：

Canale & Swain (1980), Canale (1983), ネウストプニー (1995)

(2)語用論的能力を①言語機能の能力と②社会言語学的能力から構成されると考えるグループ：

Bachman (1990)

(3)語用論的能力と社会言語学的能力を同列に扱うグループ：

Celce-Murcia et al. (1995), Celce-Murcia (2007)

(1)(2)(3)の相違点があり、その点において、各グループに属する先行研究同士は、共通点があると言える。なお、Celce-Murcia et al. (1995), Celce-Murcia (2007) のモデルは、語用論的能力は扱っていないが、下位項目に「言語機能の知識」である「行為的能力」を組み込んでいるので、語用論的能力とみなした。また、同様に社会言語学的能力も扱っていないが、適切さに関わる能力を扱っているので、社会言語学的能力とみなした。

第二の「語用論」の扱いについては、清水 (2015) の指摘を基に述べる。清水 (2015: 64) は、ACTFL OPI の評価基準を批判的に検討した結果、ACTFL の「語用論的能力」に「間接発話行為」と「含意の解釈」が含まれていないとしている。本研究で担ったコミュニケーション言語能力論の先行研究においても「間接発話行為」「含意の解釈」という語用論の特徴が考慮されていないようである。

第三の「社会言語学的能力の適切さ」の扱いについては、清水 (2015) 及び、宇佐美 (2009) の指摘を基に考えたい。清水 (2015:64) は ACTFL OPI の評価基準にある「社会言語学的能力」は「社会から期待されたとおりの使い分けができることしか念頭に置かれてない」と指摘している。これは、自分の立ち場に配慮した「受身的な」適切性でしかないことへの批判だと考えられる。また、宇佐美 (2009: 39) も ACTFL のプロフィシエンシーの概念に欠けているものの1つとして「ポライトネスの適切性」を挙げている。「ポライトネスの適切性」とは「従来とは全く異なる『相対的』な観点からポライトネスを捉える」とし、「話者の属性（母語話者か非母語話者か等）までを含む、様々な要因を考慮して相対的に捉えるのである」と述べ、「日本語母語話者の『すみませんが、お水をもう一杯いただけますか』も、初級日本語学習者の『水、おかわり』も、『ポライトネスの適切性』という観点からは、どちらも『適切』、或いは、『許容範囲内』である」としている。以上の指摘から考えるならば、従来のコミュニケーション言語能力論の先行研究における「適切性」はいずれも「受身的」かつ、「学習者のレベルによる可変性を考慮しない」ものと言えるだろう。

一方、小さい議論については、以下の3点について、相違点が見られる。

(4) ディスコース能力の扱いはどうなっているか

ネウストプニー (1995) では社会言語学的能力の下位項目、Bachman (1990) では言語知識 (>組織的能力) の下位項目にそれぞれ位置付けられている。Celce-Murcia et al. (1995) や Celce-Murcia (2007) ではディスコース能力をコミュニケーション言語能力の中核に置いている。

(5) 非言語／パラ言語学的能力の扱いはどうなっているか

ネウストプニー (1995) は、社会言語能力に入れている。Celce-Murcia et al. (1995) では社会文化的能力の下位項目であったが、Celce-Murcia (2007) では、相互作用能力の下位項目となっている。Canale & Swain (1980), Canale (1983), Bachman (1990) は扱っていない。

(6) 社会言語学的能力に「文化」の要素があるかどうか

Celce-Murcia et al. (1995) は、文化的要因に「目標言語コミュニティに関する

社会文化的背景知識」を含めていたが、Celce-Murcia (2007) では当該知識がなくなっている。Bachman (1990) やネウストプニー (1995) は言語能力外に入れている。

以上、語用論的能力と社会言語学的能力に関する共通点及び、相違点を整理したが、改めて先行研究において、その定義や相互の関係性に揺れが見られるとの認識を得た。「言語機能の成立に関する知識」が語用論的能力、「その適切な使用に関する知識」が社会言語学的能力とする Bachman (1995) の捉え方を基にした仮説的定義が成り立つように思われる。ただ、清水 (2015) の「間接発話行為」「含意の解釈」という語用論の特徴が語用論的能力には必要なのではないかとの指摘や、清水 (2015)、宇佐美 (2009) の社会言語学的能力の「適切性」の内容に関する指摘を基に、当該能力のさらなる検討が必要となるだろう。

参考文献

- 宇佐美まゆみ (2009) 『「伝達意図の達成度」『ポライトネスの適切性』『言語行動の洗練度』から捉えるオーラル・プロフィシエンシー』鎌田修・山内博之・堤良一 (編) 『プロフィシエンシーと日本語教育』ひつじ書房, 33-67.
- 近藤ブラウン妃美 (2012) 『日本語教師のための評価入門』くろしお出版
- 清水崇文 (2009) 『中間言語語用論概論』スリーエーネットワーク
- 清水崇文 (2015) 「談話というレンズを通して ACTFL-OPI の評価基準を『批判的に』考える」鎌田修, 嶋田和子, 堤良一 (編著) 『プロフィシエンシーを育てる 3 談話とプロフィシエンシー —その真の姿の探求と教育実践をめざして—』凡人社, 56-81.
- 田中春美 (2015) 「伝達能力の諸相」田中春美・田中幸子 (編著) 『よくわかる社会言語学』ミネルヴァ書房, 98-99.
- 中井陽子 (2010) 「インターアクション能力育成を目指した会話教育 —教師と学習者による研究と実践の連携の必要性—」早稲田大学大学院日本語教育研究科博士論文 <https://waseda.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=25212&file_id=20&file_no=3> (2017年9月1日閲覧)
- ネウストプニー, J. V. (1982) 『外国人とのコミュニケーション』岩波書店
- ネウストプニー, J. V. (1995) 『新しい日本語教育のために』大修館書店
- ネウストプニー, J. V. (1999) 「コミュニケーションとは何か」『日本語学』18/6 4-16
- 柳瀬陽介 (2006) 『第二言語コミュニケーション力に関する理論的考察—英語教育内容への指針』溪水社
- 義永 (大平) 美央子 (2005) 「伝達能力を見直す」西口光一 (編) 『文化と歴史の中の学習と学習者』凡人社, 54-78.
- Bachman, L. F. (1990) *Fundamental Considerations Language Testing*. Oxford: Oxford University Press. (池田央, 大友賢二 (監修) 1997 『言語テスト法の基礎』C. S. L. 学習評価研究所.)
- Bachman, L.F., & Palmer, A.S. (1996) *Language Testing in Practice*. Oxford: Oxford University Press. (大友賢二, ランドルフ・スラッシャー (監訳) 2000 『実践言語テスト作成法』大修館書店)
- Chomsky, N. (1965) *Aspects of the theory of syntax*. Cambridge, MA : The MIT Press.
- Canale, M., & Swain, M. (1980) Theoretical Bases of Communicative Approaches to Second Language Teaching and Testing. *Applied Linguistics*, 1/1:1-47.
- Canale, M. (1983) From Communicative Competence to Communicative Language Pedagogy. In J. C. Richards, & R. W. Schmidt (eds.), *Language and Communication*. London and New York: Longman. 2-27.
- Celce-Murcia, M, Dornyei, Z., & Thurresl, S. (1995) Communicative Competence: A Pedagogically Motivated Model with Content Specifications. *Issues in*

- Applied Linguistics*, 6(2) 5-35. <<http://escholarship.org/uc/item/2928w4zj>> (2017年9月1日閲覧)
- Celce-Murcia, M. (2007) Rethinking the Role of Communicative Competence in Language Teaching. In A. A. Soler., & M. P. Safont Jorda(eds.), *Intercultural Language Use and Language Learning*. Dordrecht : Springer. 41-57.< https://canvas.harvard.edu/files/926812/download?download_frd=1&verifier=HL5njGKyAX7HvsYMG11DrU3H57BhuU4dLI4qrELT> (2017年9月1日閲覧)
- Fishman, J. A. (1972) Domains and the relationship between micro- and macro-sociolinguistics, In J.J. Gumperz, & D.H. Hymes (eds.), *Directions in Sociolinguistics*. New York : holt, Rinehart and Winston, 435-453.
- Hymes, D. H. (1962) The ethnography of speaking. Reprinted in J. A. Fishman (ed.), *Reading in the Sociology of language*. The Hague : Mouton 1968. 999-138.
- Hymes, D. H. (1972) On communicative competence. In J. B. Pride, & J. Holmes (eds.), *Sociolinguistics*. Harmondsworth : Penguin.
- van Dijk, T. A. (1977) *Text and Context : Explorations in the Semantics and Pragmatics of Discourse*. London : Longman.